春秋

2012.5.14

北九州市出身の武藤正子さんが、豆紙人形を作り始めたのは88歳のときだった。お手玉や竹馬で遊ぶ子ども。ハイカラな女学生やお嫁さん。大正から昭和の風俗を、手のひらに載る愛らしい人形で表現した▼69歳で右目を失明し、肺や心臓に持病があった。それでも「何かを始めるのに遅過ぎることはない」と話していた。89歳で大腸がんを手術し入退院を繰り返した。白内障の左目の視力も薄れたが、記憶を頼りに病床で小さな紙を折り続けた▼そんな生き方を、次女で作家のヒロコ・ムトーさんが「手のひらのしあわせ」という本にした。「おばあちゃんの作品と人生に励まされた」という声が数多く寄せられた。国内各地や米国、パリで作品展が開かれ、90歳を過ぎてから紙人形作家マサコ・ムトーとして知られるようになった▼武藤さんは6年前、93歳で亡くなった。約300の作品を残したが、半数近くは海外の学校などに寄贈した。日本にない作品も見てもらいたい。大作「東海道五十三次」も完成させたい。そんな思いから、ヒロコさんは母の作品を再現する「真似紙人形」作りを始めた。「今が始まり。毎日が始まり。今日を悔いなく生きれば、何があっても怖くない」。母が残した言葉を、作品とともに伝えたい、と願う▼2人の「豆紙人形・母娘展」が5月23日から東京・新宿区の「アートガレー　カグラザカ」＝03(5227)1781＝で開かれる。